

平成3年（一九九一）

6月 日 広島県の同業者と上海・北京八日間の旅。一行に魯迅ゆかりの人がいて、上海では魯迅記念館館長より熱烈歓迎を受け、魯迅の書入りの立派な扇子をもらう。

北京で古本屋を何軒か見つけたが、唐本も含め古書らしいものはほとんどない。値段も日本よりずいぶん高く、戦時中の新村出著『辞苑』が三千元。

一般の物価は日本の三十分の一以下なのに……。やはり統制のため昔の本は出てこないのか？それとも紅衛兵に焼き払われたのか？

7月×日 某紙山口版の「人」覧にQ生が登場。『長岡叢書』と『防長回天史』紹介のあと、「三、四年後には『防長地下上申絵図』を出したい」と格好良く言ったことになっているが、「関係官庁や先生方の多大なご協力が得られれば」と強調したのに、それが抜けている。

7月 日 前回のDMで『山口県文化史年表』

の提供を募ったところ、多数のお申し込みをいただき有難い。

ところがよく見ると、同じ「増補改訂版」でも、昭和四十三年に県が出したものより、それを原本にして昭和五十年に小社が復刻したものの方が読みやすい。復刻するとき文字がやや肉太になるからだ……。復刻版も捨てるのではない。こちらを原本に使おう。

8月×日 北海道の田中彰氏と山口放送の竹下尚子さんが、『杉明治先生伝』の著者、中村助四郎氏の令息、中村修画伯のところへ行かれるためアツシー君で随行。目的は「吉田松陰秘話」の聞き取り。衆知のことながら、杉民治は吉田松陰の実兄である。

夜は三人で一献。『吉田松陰の研究』などで知られる広瀬豊氏の令室、広瀬敏子著『松陰先生にゆかり深い婦人』（昭和十一年武蔵野書院）について、まだ戦時色に染まっていないから、復刻してもいいだろうとのこと。

「いつも私では……」と辞退されたが、「急ぎませんから」と「解題」を田中氏にお願いし

た。

8月 日 上京。神保町も夏休み。

久しぶりに萩毛利家の当主・毛利元敬氏とお会いし、銀座で日本料理をご馳走になり、毎度のことながらいろいろと教えていただく。8月×日 徳山高等学校、卒業四十周年記念の同窓会。幹事で忙しかったが、何と全体の約四割にあたる百五十名が出席し、大盛會。

8月 日 静岡大学の田村貞雄氏来店。数年前、初代山口県令・中野梧一の「山口時代の日記」を発見。県内の村々巡回の後を追うなどして詳しく調べておられたが、いよいよまとまり、近く原稿を持参されるとのこと。

全国的にみても、初代県令の日記などこれまで公表されたことがなく、その上いわゆるある人物なので、面白い本になりそうだ。

8月×日 『防長回天史』売り切れ。昨年从今年にかけて、小社の刊行物はマスコミ関係には全く送っていない。倒産したと思われるかも……。

『防長回天史』の予約者中、キャンセルは発送

前に六人、発送後七人あり。ほとんどが「健康上の理由」で、「難解のため」はたった一人（その後「支払い不能」による返品二人あり）

いまの若い者は本を読まないとはかり思っていたら、このたび本書を買った人の中に徳山高専の生徒があり、感心なことに、春休みと夏休みにアルバイトをして、九万円をすべて自分の稼ぎで払ったという。日本も捨てたものではない！

9月 日 朝日新聞山口版の女性だけのコーナーに、これからは男性も登場することになり、一番バッテリーにQ生が指名を受けた。

十月中旬から毎週金曜、「ほんの周辺・地方出版の眼」という題で八百字の随想を連載する。イラストは『周防の女たち』で好評だった千葉の島利栄子さん。

9月×日 夏休みの前半、またもや本棚がガラ空きになり、「よその古本屋には雑本が余って困っているのに、なぜうちだけこんなに足りないのか」と嘆いていたが、現金なもので涼しくなるとたちまち買入れがふえてきた。

それにしても安い本の動きは速く、回転率では全国どこの本屋にも負けない。それとも一つ、女性客の多いことも……。

9月 日 山口市の田村哲夫氏による永田瀬兵衛著『毛利元就軍記考証論断・新裁軍記』の校訂は着々とすすんでいるが、少しまとまるたびに三坂圭治氏のところを持っていき、チェックしてもらっている。

三坂氏は少し体調を崩され、ここ数年一歩も外へ出られないのに、お仕事は昔と少しも変わらず、一字一句ゆるがせにしないきびしい校訂ぶり。

明年一月一日に米寿をお迎えになるが、まだメガネなしで本が読めるのだから、もう怪物としか言いようがない。向かい合って座っているQ生は三十も若いのに、三回もレンズを入れ替えている……。

9月×日 朝日の連載、責任重大なので、D Mの発送を一か月延期し、仕事を放って二十日間くらい書きまくり、十六編ほど仕上げた。これではばらくは安心。

9月 日 台風十九号襲来。

未曾有の風害。停電、断水あいつぎ、徳山近辺は昭和二十年の米機爆撃以来ともいえる打撃を受ける。でも本は腐らないので、被害は少ない。

10月×日 千葉、広島、大分などから九名の不良中年が集まり、久住登山。日頃のおこないが悪いためか、ふもとは晴れているのに山は雨で登れず。

10月 日 毎日新聞西部本社版に連載中の「人脈紀行（梓に刻む）」に小社も取り上げられることになり、本社記者の桜井茂氏が取材に見えた。

10月31日 毎日の連載、小社は四回にわたって好意的に紹介され大満足。

11月 日 今回DMの成果、三百部限定の『長周叢書』は予想通り満杯。

部数を少しふやそうかとも思うが、いつもふやしては信用にかかわる
11月×日 目録注文を発送している。忙しさに紛れてのインスタントな「郷土誌目録」に

もかかわらず、たくさんのご注文を頂き、有
難い。二六五件の申し込みで、掲載書の八割
一三二冊が売れたため、確率は二分の一。さ
すがに三十万円の『長周叢書』（原本）は売れ
なかつた。あわてて投函されるためか、氏名
を記入していない注文書がよくある。電話で
確認してはいるが……。

11月 日 『山口県文化史年表』出来。しかし
よく見ると、ケース背文字の「マツノ書店」
は下がりすぎ。また「序」と「凡例」の計四
頁は、印刷が外に寄りすぎて見苦しい。何と
も初歩的なミス。

「こんなもの、うちの名前で出せるか」と思っ
たが、折あしく印刷所は年末で最多忙。修正
に二週間もかかるという。すでに発送の手は
ずを万全に整えているし、内容に全く関係の
ないミスなので、予約の五百冊だけ目をつぶっ
て発送。（注・このあと作り替えましたので、
ご希望があれば交換に応じます。蔵書印や書
き込みがあっても構いません）

11月×日 東京に国内留学しておられる山口

大学の影山純夫氏と渋谷で一献。『防長古器考』
の打ち合わせ。

『萩藩閥閥録』『萩藩譜録』及び『防長寺社
証文』の別巻「器具編」として、これら三編
を補う必要不可欠の史料ではあるが、三千頁
近くもある大冊。どれだけ売れるやら？

12月 日 十数年も探していた、この図書
館にもない幻の本『豪商早見便覧・長門の部』
を骨董屋で入手。小さなボロボロなのに、何と
一冊二十万円也。同書「周防の部」とペアで
復刻しよう。

12月×日 広島島の三倉岳へ忘年登山。医学博
士・中島篤巳氏に登山中の血圧を継続的に調
べて頂いたが、異常なし。首から下だけは丈
夫なのだ。

12月 日 大阪にて、京都の松籟社主催の忘
年会。つき合いが悪いので、忘年会は県内一
回、県外三回のみ。

12月×日 シリーズ『日本の名随筆』（作品社）
の「古書」というテーマの一冊に、このQ生
の「いなか本屋の四季」という文章が載るら

しい。明年二月に刊行されるとか。

永井荷風、大佛次郎、井上ひさし、反町茂
雄他の名だたる大家と相席とは、何とも厚か
ましいこと。

平成4年（一九九二）

1月 日 商店街のおつきあいで伊豆半島へ。

「伊豆の踊り子ライン」をバスで走り、吉田松陰が命を賭けた下田の海に若者のウインドサーフィン姿を見る。「上げ膳下げ膳」の観光旅行は二日で飽き、途中からひとり上京。

1月×日 初めて文化庁へ。文部省と同居の建物は何とも古めかしく、狭苦しい。国の文化行政への姿勢をそのまま現わしているようだ。

1月 日 『久坂玄瑞全集』出来。『山口県文化史年表』の時のヤイトが効き、今度はほれぼれするような良い製本。「この内容、この厚さ、この風格で一万二千元はたしかに安い」と自画自賛しきり。印刷所へ最敬礼！

2月×日 別の印刷所の『長周叢書』は予定より二週間以上も遅れた上、少しずつしか入荷せず。しかも最初の百セットは箱から出にくくて困った。

印刷所に文句を言つと、「製本・製箱業者が

少なく、無理を言えない」とか。少し前までは専門家がいたのに定年などで辞めていき、

今では上製本は外注しているらしい。

そのうち、「張箱入り」というだけで古書価がつくようになるかも？

2月 日 『長周叢書』の奥付に、あつと驚くミステーク。刊行年を間違えたのだ。復刻なので、千五百頁のうち自分に責任のある唯一の頁なのに……。Q生の校正する本はもう出せない。

2月×日 二点とも予約者への発送を終え、次はマスコミへのPR。

考えてみれば、品不足で一年半もマスコミへご無沙汰していた。今回も、再復刻の『久坂玄瑞全集』だけで、『長周叢書』は一冊も送れず。

2月 日 「せっかく『長周叢書』を買ったけど、難しすぎるので返したいのですが……」
「どうぞどうぞ。私共もパンフ一枚では詳しくお知らせできないのですから、遠慮はいり

ません。ただし、返送料だけはそちらでお持ち下さい」

本書はもつと返本が多いと覚悟していたのに、たった一人、東京近辺に住む最近のお客であった。

2月×日 大市のため上京。古書の相場も、世相を反映してか乱高下ぎみ。

神田の古書街をめぐって、小社の刊行物の「出世」ぶりを眺める。何年も動いていないらしいものもあるが……。

『防長風土注進案』四十五万円（小社の予約
特価・十一万円）、『毛利元就卿伝』二万五千
円（八千五百円）、『毛利輝元卿伝』二万五千
円（八千五百円）、『吉田松陰詩歌集』三万八
千円（一万四千元）、『豊浦郡水産史』三万八
千円（一万六千元）。『久坂玄瑞全集』四万八
千円（今回復刻・定価一万二千元）等々。た
ちまちクズになる出版物も多いのに、有難い
こと。

3月 日 『久坂玄瑞全集』は各紙に紹介され、
電話注文が八十を超える。（ヒササカ・ゲンタ

ン」と発音した、ある大学の図書館人も含め、九割は県外。小社の販売網が、県内の読者を開拓し尽くしていることを改めて証明した。

3月×日 『防長古器考』のパンフレット製作にかかる。

ふり返れば、県文書館からの許可がおりるや、すぐ写真三千枚をとり、三坂圭治氏へ持ち込んで、はや六年。

さすが大学の三坂圭治氏も、畑が少し違うこともあつて、「句読点を入れるだけで、一晩に数頁しかいかないこともある」とかで、ピンチヒッターを依頼された。そこで、山口県立美術館から山口大学に替わられた影山純夫氏に泣きついたのである。

それにしても六年といえは、奇しくも二百年前、萩藩が本書の制作に要したと同じ歳月、絵図を優先したため活字化は不可能だったが、これまで書名しか知られていなかった、全国にも例のないこの貴重な文化財を、自宅の書齋で手にすることができた。

「この種の本はたちまち売り切れ、古書価も

暴騰する」という景気の良い下馬評もあるが、今は、何とか売れてくれよと願うのみ。

4月 日 店頭の均一コーナーを、一日だけ「無料」にしたところ、予告なしにもかかわらず、五百冊がはけた。

4月×日 毎週金曜、朝日新聞山口版に連載中の「ほんの周辺」は、三十回の予定が、好評のため(?)、四十回に延長となった。

4月 日 山口行。田村哲夫氏による『新裁軍記』の校正が峠を越えた。次の仕事として、誤植の多い『奇兵隊日記』(全4巻)を原本と照合し、「索引」を新しくつけた。校正・奇兵隊日記』の刊行はどうかとのこと。

これはまたヨダレの出そうな企画！誰もが思いつくことではあるが、実行できるのは今、この人しかいない。改めて、『防長回天史』(全12巻)の「索引」をたった一人で作られた、昨年の超人的なお仕事ぶりを思いだす。
4月×日 北海道の田中彰氏ご来店。『奇兵隊日記』のことを相談する。

驚いたことに、京都の尊壤堂にある原本の

マイクロフィルム版からのコピーを持っており、貸して下さるとか。また、尊壤堂には『奇兵隊日記』付録の「関係地図」もあるとのこと。

4月 日 田村哲夫氏を訪問。「そんなに条件が揃っているのなら、いっそのこと新版をつくろう！」

かくして、地図、索引付きの『決定版・奇兵隊日記』がスタート。

昨年復刻した『防長回天史』も、本当は句読点を入れて新しく組み替えたかったのに、あまりにも膨大なため断念したが、もう一つの維新関係基本史料である『奇兵隊日記』は、何とか実現させたい。

4月×日 山の本二点を同時に発刊。とくに『周防一〇〇山百景』は三千部も刷ったので大変だ。でも千部以上つくるのはこれが最後と思うと、この喧喚も何だか名残惜しい。

5月 日 四月中旬に発送するはずのDMが、とうとう五月の連休明けに延びた。印刷所と

のつきあいには、一ヶ月以上のサバ読みが必要であることを、この歳にして知る。

5月 日 上京。國學院大学の米原正義氏に渋谷でご馳走になったのはよいが、今秋に予定していた『陰徳記』がもう半年遅れるとのこと。百冊近い古文書を一千五百頁以上の活字本にするのだから仕方がない。

待つ（マツノ）だ！

5月×日 『防長古器考』のパンフ印刷中、急に思い直して「五百部限定」を三百部限定に変更。滑り込みで間にあう。

5月 日 やはり「防長古器考」の予約は思うほど伸びない。六年もかかったのにと腹を立てるが、何事も、手間をかけたからうまく行くとは限らない。

いま山口県史料でいちばん古書価の高い『防長風土注進案』でさえ、最初は内容がよく知られていなかったため、それほど売れなかった由。

それにしても「キチガイ三百」とかで、小社がこれまで三百部しか作らなかった本は、

後で例外なく稀覯本になっている。先が楽しみだ。

5月×日 ダメを承知で、県外の県立図書館や歴史・民俗博物館、時代小説作家などに約三百通のDMを送ったが、やはり確率はゼロに近く、通信販売を新しく始めることのむずかしさを改めて痛感。

5月 日 お得意様には申しわけないと思っただが、締切直前の「再度のお知らせ」を今回は出さないことにした。

波状攻撃はDM直販の常識。これで毎回、かなりの駆け込み注文がきており、何もこんな高額本の時から急に方針を換えなくてもいいのだが、いつもと違い「予約が少ないため」このような「おしらせ」を出すのは、いかにも物欲しげで、気分がよくないから止めた迄。
6月×日 「防長古器考」の予約締切り。予想をかなり下まわり、二百部ぎりぎり。久しぶりの赤字出版に身が引きしまる。

しかし、ものは考えよう。この不況時に、八万円もする本をパンフ一枚で二百部も売る

とは、大した信用（いや心臓？）ともいえようか。

今回の予約者の内訳は、県内六割。個人と公では県内・県外とも個人八割。平均年齢は五五歳であった。

6月 日 図書館も含めて県内にわずか二冊、徳山の浅田薬局と山口の福田百合子氏宅だけに現存している『山口県巨豪商早見便覧』をどちらも借りてきて、印刷所で写真をとる。今秋の目玉にしよう。

6月×日 初めて沖繩へ行く。

7月 日 前回「決定版・奇兵隊日記」のことを書いたところ、方々から賛同や激励を賜り、気の早い注文も次々と舞い込んでいる。

今日は北海道の田中彰氏と一緒に田村哲夫氏を訪問。「今年中には目鼻をつけたい」との力強いご返事。

原稿と逐一比較すると、これまで四回も出ている「日本史籍協会本」には、人名・地名を中心として、何と一頁に四、五箇所もの誤植があるだけでなく、原稿の読みにくいところ

ろはわざと抜かしてあったり……、信じられないお粗末さだという。

7月×日 長門市通（かよい）の民宿で、本年度の山口県古書組合総会。

この一年間、県内の業者数は横ばい。売上の七割をゲームソフトで占めている店がいちばん元気。そういえば沖繩の古本屋でも、たいてい中古ソフトを置いていた。新刊マンガの売れゆきも全国的に落ちてきたというし、古本屋の前途も多難だ。

7月 日 東京。国立国会図書館で、明治十九年増補の『山口県巨豪商早見便覧』から「岩国」と「萩」の部、数十頁を特別にコピーさせてもらう。先日借りた初版本にはこの二市が入っていないのである。

7月×日 毎日新聞学芸部の奥武則氏から店に電話あり。ちょうど国会図書館にいたので、すぐ本社に駆けつける。タクシーで五分。東京は便利だ。七月二十日の読書欄に「バブルなんか無縁だね」という題で出た。

7月 日 神田の三省堂書店で評論家の神崎

宣武氏に会い、「山口県巨豪商早見便覧」の相談に乗って頂く。

「業種別に分類し、解説をつけると、わかりやすくなるし、県外の者がみても面白い」とのこと。待ってましたとばかり、厚かましくもその執筆をお願いし、快諾を得る。

もちろん、今秋のことにはならない。代わりを探そう。

7月×日 栃木県の奥塩原温泉にて、「首都圏出版人懇談会」の夏期合宿。特にこれといった収穫無し。

8月 日 あれこれ考えた末、今秋の出版は昭和八年に出た『山口市史』と「趣味の山口」の二点にした。

いずれも御園生翁甫、小川五郎、石川卓美という「防長史学」の第一人者が蘊蓄を傾けた、史料価値の高い稀書。市制施行を記念して作られたものと思われるが、片や表玄関、片や勝手口の方から見ており、両書相まって、古き良き時代の山口を知るために欠かせない貴重な本だ。

三年前、「山口市制六十周年」の時すでに復刻許可をとり、パンフの原稿までできていたが、便乗出版をしたくないので、出さなかった。それにしても「市町村史」は、なぜ、昔の物ほど内容が良いのか？

8月×日 田村哲夫氏にお願いしてあった『新裁軍記』の校正完了。「陰徳記」を後回しにして、こちらを先に下さざるを得ない！

8月 日 「小学館に赤松あり」といわれ、ミリオンセラー「ドラえもん」「オバケのQ太郎」「おそ松君」の編集をはじめ、各種雑誌、単行本のデザイン、レイアウトなど、東京で素晴らしい仕事をしていた、Q生の高校時代の同級生赤松吾朗（本名・赤松育延）氏が、このほど奥さんの里である徳佐に帰郷。早速、今回のパンフ三点の題字やデザインを依頼。マンネリ気味の仕事に喝が入りそう。

氏は洋画家としても知られており、今後、県内での活躍が期待される。

8月×日 一カ月遅れでようやく『防長古器考』出来。この重厚さをみると、やはり五百

部つくるべきであったか・

8月 日 この六月に復刻した『防長百山』を何冊か店のカウンターに置いてみると、いつの間にか本体の背文字が少しずつ消えていく。はげるのでも、薄くなって消えるのでもなく、隅の方からくつきりと無くなっていく。「目の荒い麻のクロスなので、箔押しには特に気をつけるように言っておいたのに……」とそのつどまとめて印刷所に突き返し、背文字を押し直してもらっていた。

「今度こそ絶対に大丈夫」と押し直してきた本も、何日かたつと、あーら不思議や、また半分くらい消えている。変なことに、他の場所においてあるのは消えないし、本書を買ったお客様からの苦情もない。まさに夏の夜のミステリー「消えた背文字事件」。

そのうち本書の上を足早にはっている体長三ミリくらいの黒い虫二匹を捕えた。最近の箔押しの材料には食品も入っていると聞いていたので、すぐつかまえて印刷所に渡した。その虫は印刷所で白を切ったまま死んだ由。

しかし、その後も似た虫を見かけたというのに、なぜかその日から全く消えなくなったのである。

9月×日 『防長古器考』を発送して二週間たつが、返本はゼロ。助かった！

9月 日 九月刊行の本紙第一号の古書目録の平均競争率は1、7倍。

最高は堀山久夫編著「国司信濃親相伝」の15倍であった。

10月×日 『山口市史』『趣味の山口』は印刷・製本とも東京である。これまで県内を優先してきたが、久しぶりに相見積をとつてみると、何と一点につき〇十万円も違うのだから仕方がない。おかげで「二冊一万円」という超特価をつけることができ、そのためか予想を上回る売れ行きで、『趣味の山口』は限定五百部の予定を六百部にした。

10月 日 広島古書組合のバスに便乗して長崎県の大市へ。

10月×日 元広島大学文学部長の松岡久人氏に「新裁軍記」の推薦文をかねた序文をお願い

したら、熟読のうえ校正の労までとつて下さった。有難や有難や。

11月 日 久しぶりに古書部の店番。ハーレクインというシリーズを買っていく女性のお客が多いのにびつくりする。

一冊百〜二百円と安いからか、一人で平均四〜五冊は買っていられる。

11月×日 東京から「山口市史」など各六百冊、一トン以上が入荷。一気に二階へ運び上げる。この商売も体力だ。

11月 日 古川薫氏より近著「天辺の椅子」を頂く。徳山出身の軍人・児玉源太郎の生涯を描いた毎日新聞の連載小説だが、実によく書けており、これぞ古川文学の最高峰。

11月×日 雨の中を山口行。三坂圭治、石川卓美、内田伸、田村哲夫の諸氏に『山口市史』『趣味の山口』のお礼まわり。

11月 日 上京。今回の出版でお世話になった古武道関係の版元・壮神社社長の恩蔵良治氏と一献。

翌朝は六時過ぎの新幹線で京都に下り、京

大付属図書館で田中彰氏と落ち合い、尊穰堂の奇兵隊日記原本を閲覧。霊山歴史館で「大龍馬展」を見て、夕方徳山に着き、田中氏を囲んでささやかな酒宴。

その翌日は田中氏のお供で長府博物館にクルマをとばし、特別展「坂本龍馬と下関」を見学のあと東行庵へ。博物館では館長の濱水只夫氏と、東行庵では学芸員の一坂太郎氏と話はずみ、二館だけでも夕方。それにしても、自由奔放な龍馬の手紙は、いつまで眺めても飽きない。

11月×日 朝、毎両紙とも「消えてゆく町の本屋さん」というタイトルの大特集。中小の新聞屋が急激に姿を消しつつあるという。この記事にはないが、専門書の版元も非常に経営が悪いらしい。

これはバブルとは関係ない。こうなるのはもう十年も前からわかっており、いずれも諸悪の根元は本の「再販制」なのに、なぜかその制度こそ出版社と新聞屋を守ってくれていると、被害者自身が思いこんでいるのだから

わけではない。

11月 日 『山口市史』『趣味の山口』早くも完売。出版物の95%以上が、マスコミや同業者への卸売に頼らず、自前の直販だけで売れるようになった。今年の大きな特色といえよう。

12月×日 「復刻希望アンケート」2300通を発送。今回は大正六年刊『維新戦役実歴談』や内田伸著『鑄銭司村』など、すでに手はずの整っているもの以外から十二点を選んでみた。

12月 日 佐々並の山本弘秋氏が河野通毅著『吉田松陰の詩と文』という本を送って下さった。「誰にも読みやすい名著なので、復刻されては」と。有難いこと！

12月×日 「もしもし、さんでしようか？『防長古器考』の分割代金が二万円ほど多く入っていますけど、何の便でお返し致しますしょうか？」

「何でも結構ですよ、それからアンケートは出ませんが、お宅の本はこれからもみんな

買いますので、全部 印と同じですね……」

岡山県の法輝寺住職への電話である。小社の出版は研究者だけでなく、多くのこのような篤志家によっても支えられている。

12月 日 上京。初日は紀田順一郎氏と、二日目は地方・小出版センター社長の川上賢一氏および書籍情報社社長の矢部宏治氏らと一献し、高説を拝聴。東京はあらゆる情報が一晩で入ってくるから便利だ。

12月×日 東京で刊行された広島県『芦品郡志』は限定7百部・620頁・1万8千円という。小部数の復刻本は「30円/1頁」の時代なのだ。

12月 日 アンケートの返信が七百通を越えた。三人に一人だ。予想外の反響につれしくなる。不況なればこそ、古典・こだわり・高品質の3K商品がますます求められているのだ。小社への「苦情」を思いきり書いてもらうためもあって「無記名可」にしたのに、それらしいものは何も書いてなく、いささかがっかり？

平成5年（一九九三）

1月×日 初めて、どこにも賀状を出さなかった。

年末から正月にかけて、何とも落ちついてゆっくり過ごすことができたが、うず高い賀状の束を見ると、なんだか申しわけない気持ち一杯。来年は必ず出そう。

1月 日 DMを発送したあと、パンフに三か所も誤植をみつけた。気づいたお客様からもお電話をいただき、何とも締まらない話。

1月×日 今回の「古書目録」は高額書が多いため注文は少ないと予想していたが、平均競争率はいつも変わらず1、6倍。いちばん多かったのは、『白石正一郎日記』の十一倍。『郷土誌特選「シーナ」』では、村谷正隆著『海賊史の旅』がトップで、在庫がなくなり、出版社にもないため、著者に「ご無理をお願いして25冊送って頂いた。」

1月 日 小野田の長老高橋政清氏のお世話

で、『国司信濃親相伝』の著者堀山久夫氏の子息堀山昭典氏に本書復刻のご了承を得る。

1月×日 神崎宣武氏が『明治期山口県商工図録』の解説を持参され、五月刊行に踏み切る。他県でも類書が少し復刻されているが、解説・印刷・製本ともずば抜けて最高のものができそう。

2月 日 DMの締切日。毎度のことながら駆け込み注文多く、両書とも430冊をこえた。

『防長文化史雑考』は五〇部増やそう。『新裁軍記』は採算点ぎりぎり。積極的にPRすればもっと売れたと思うが、「予約特価」はあくまでもお得様だけへのサービス。

2月×日 所得税申告の季節。久しぶりの赤字となる。これで税務署がこなくてよい。

2月 日 古川薫氏にお願いしたばかりの、宿利重一著『児玉源太郎』復刻版への推薦文が早くも届いた。

さすがによく書いており、本書は成功間違いなし。著者のご遺族を以前から探している

のに、まだ見つからないのだけが気になる。

2月×日 『奇兵隊日記』に全力を投入しておられた田村哲夫氏が、思いがけぬ事故で入院された。『新裁軍記』の校訂を完全に済まされた後だったのが、不幸中の幸い。

2月 日 毎年のことながら、二月は店の本棚が空いて困る。とくに文庫と趣味の棚はガラ空き。売れる方はふつつなのに、寒いため本棚を整理するのが面倒なせいか、買いが少ないからだ。

それにしてもこの物余りの時代、全国どんな店も商品に埋もれているというのに、売るのがないとは！

そういえば昔、貸本屋のころも、お客は多いのに商品がなく、腹立たしい思いをしたことがある。人間がせっかちすぎ、本も金も留まってくれないのだろうか？

2月×日 新南陽市に住むある主婦がこの三月、公正取引委員会主催のシンポジウムに出席し、「書籍の再販制」について討論するとか。

待つていましたとばかり、Q生の持論を述べ、資料を提供する。再販制に大きな疑問を持つていてる人で、たいへん、喜ばれた。

今や前時代的な「再販制」が残っているのは出版界だけ。「本は書店や取次会社のためではなく、読者のためにある」という原点に立てば「本を注文して何週間も待たされる」などアホ臭いことはすぐ解決するはず。

3月 日 このところ時代小説四百冊 戦記物三百冊 山口県郷土誌二百冊など、連日の大口買入れ。ようやく店が賑わってきた。季節は争えないものだ。

3月 日 半年ぶりに秋へ。
以前から探していた1993年版の『小郡町史』を、郷土史家の田中助一氏に貸していただく。

本書の「増補版」も含め『小郡町史』は三回も刊行されているが、史料価値はこの初版本がいちばん高く、しかも、今や県内に数冊しかない稀観本。かならず復刻しよう。

3月×日 ある人から『趣味の山口』のよう

な薄い本は、もっと瀟洒（しょうしゃ）な装丁の方がきれいだし、価格的にもいいのでは？」といわれた。

その答えは百年先に出る。今はやりの「軽装本」は変形・変色し、見るかげもなくなっているのに、小杜の「完全武装本」はピクともしていないであろう。何よりの証拠に、復刻のため集めた本書の原本は、刊行後60年で、五体満足なのは八冊のうち一冊しかなかったのである。

百年前の本を扱っている古本屋が出版をする、こうなるのだ。

3月 日 山口で朝日新聞山口支局長の白石敏氏にたいへんご馳走になる。画家の赤松吾朗氏も同席。

考えてみれば、山口の夜は十数年ぶり。県庁所在地での夜のつきあいがこんなに少ない地方出版社も珍しいと思う。

3月×日 児玉源太郎の研究者として知られている徳山の長田昇氏に今回の復刻版への後書きをお願いしたところ、これまで不明だっ

た著者・宿利重一氏のことを詳しく調べて下さった。ご遺族がわからないはず、どうやら血統は絶えているらしい。

4月 日 不況で古本屋の存在が見直されたのか、直木賞「出久根効果」のせい、今年になって店の売り上げが割以上ふえている。
4月×日 『山口県文化史雑考』『新裁軍記』相次ぎ入荷。朱で番号を記入し、順次発送する。

今回は、予約締切後二ヶ月もお客様を待たせた。予約によって出版部数を微調整するためだが、何かしら間延びがする。次からは同時進行にして、締切後十日くらいで本が届くようにしよう。万一、予約で売り切れても仕方がない。

4月 日 宇部行。『山口県文化史雑考』を、著者のご子息で社会党の国会議員・小川信氏へ届ける。

氏はごく普通の家に住み、まことに庶民的な暮らしをしておられる。親譲りなのか、木訥で、いかにも清廉潔白な感じ。テレビに出

てくる金の好きな老人などは雲泥の差だ。

本書の出版についても、政治がらみは何もない。つまりスポンサーになってもらったわけではない。普通の復刻と同じで、刊行部数の2%、11冊を現物でお支払いしたまで。

4月×日 記録によれば、九年前に出した『毛利元就卿伝』は、何と24冊もマスコミに配っている。それに対し、姉妹編ともいうべきこの『新裁軍記』は、わずか三冊しか贈呈していない。

マスコミ万能の世に抗し、小杜からの直でなければ本も情報も入手できないようにしたいのだが……。

4月 日 今年の春休みもマンガの買い入れが多く、倉庫が満杯になり、一部優品だけしか買い取れなかった。それでも、多すぎるのはマンガだけ。小説類は足りない。

4月×日 四国へ。高知はそれほどでもなかったが、松山の古本屋では店の広さと在庫量に圧倒される。うちの何倍もあり、店主は本の整理に追いまくられ、「一日が四〇時間くらい

欲しい」とぼやいている。

私の店も二階を店に使えば、あれくらいの広さにはなる。仕事だけが趣味ならそれも悪くないが、やはり店を広くせず、支店を出さず、スーパーの軒先も借りず、「六時閉店・火曜定休」でのんびりいきたい。

SIMPLE IS BEAUTIFUL なのだ。

5月 日 『火車日誌』をまとめて本にしては？「また、「昨年、朝日新聞山口版に長期連載した『ほんの周辺』は出版しないの？」とよくいわれる。

復刻に徹し、第一人者の校訂による学術史料以外に新組は出さない、ましてや中途半端な本は絶対に出さない方針なのに、自分のものだけ安易に妥協するわけにもいくまい。

5月×日 田村哲夫氏の療養が長びくので、

『奇兵隊日記』校訂のピンチヒッターを山口県立図書館の樹下明紀氏にお願いしたところ快諾され、「夜のつきあいを一切絶って」全力疾走中。「今秋にはすべての原稿が出揃う予定」とか。

8月 日 広島・大分・千葉・山口から男女八名、北アルプス白馬岳へ。今年も頂上寸前で雨のため涙。

頂上直下の白馬山荘は一畳に三人以上、晩飯は夜10時以降というのに、受付で濡れたまま一時間も待たされるほどの混雑ぶり。

「の高上がり」を横目で見ながら、十分ほど下った村営小屋で優雅に過ごす。

8月×日 このたび刊行した『児玉源太郎』が「毎日」の夕刊に紹介された。全国版なのに注文の九割は東京近辺。地方を眼中におかない出版が成り立つわけ。

8月 日 小社の古書部は在庫も少なく、軽い本ばかりだが、とりえは安くて回転のよいこと。

夏休みは県外のお客様によるまとめ買いが多い。五十冊五千円のきれいな文学全集から珍しい郷土誌まで、毎日のように発送している。

9月×日 『奇兵隊日記』の原稿、約二千頁分

ようやく印刷所へ。

まだまだ、これから校正や索引づくりが大変なのだ。

9月 日 『萩藩閥閥録』はすでに二度も復刻されているのに、最近また古本屋で、十六万円もの高値になってきた。

「そんな、うちで復刻すれば六万円を提供できるのに」と、復刻許可願いを山口県文書館に提出。

9月×日 買入れで山陰は益田まで張り切つて車をとばす。うす暗い蔵の奥で、懐中電灯の光に浮かび上がる初版本の数々。しめたとばかり、急いで買ったところが、見まちがえて、十万でよいものを二十万円も出してしまひ、一世一代の不覚。

旧家の格式に位負けしたのか、それとも、古本屋の目には暗い蔵の中の本はすべて稀褌本に見えるのか。

9月 日 最近はやりの「郊外型古本チェーン店」の県内第一号店を宇部まで見に行く。スーパーに隣接した百坪以上の店で、車が楽

にとめられ、入りやすい。百円均一を主体

に、マンガ・文庫・新書がずらり。「狭い・暗い・汚い」古本屋のイメージとは逆で、完全に女性客を意識し、店番も女性パート。狙いは間違っていない。(自慢じゃないが、小社は二十年前から女性路線なのだ)

今やどの商売も競争激烈。脱出口を求めて、一見気楽なこの業界にたどり着いたのだろうか、並べてある本は「消耗品」ばかりで、奥行きとバラエティーに欠ける。同じ定価の本が、古くなると、片や 千円、片やゴミになるのに、マニュアル商法でそのゴミ本ばかり集めてどうする？古本利用者の裾野を広げてくれる効用はあるが。

9月×日 名古屋から秋雨けむる中央線を一路松本へ。郷土出版社の主催で島利栄子著『キッチンの窓から』の出版記念会に出席。

五年前、小社で処女出版した『周防の女たち』が全国的に好評を博した島さんは、ご主人の転勤に伴って千葉へ。その後は千葉県と生まれ故郷の長野県を舞台に取材を続け、こ

の三年間に三冊を上梓するといえます。活躍ぶり。

才媛のパーティーは、ボーイフレンドの虫干しで大にぎわい。二次会五十人、三次会も二十人以上、午前一時半ようやく散会した。

9月 日 せっかく信州まで行きながら、古書大市のため翌朝は七時の特急で東京へ。おかげで『木戸孝允文書』(全8巻)、『防長寺社由来』(全7巻)などの収穫あり。

それにしても古書価の二極分化は予想以上。良書払底の今、復刻の仕事は改めて見直される。

9月×日 郵便料の値上がりを前に、いつの間にか二千五百名に肥大した名簿を「二千通限定にすべく、パソコンと取り組み大鉈(なた)をふるう。

これまで届いていたDMが、今回から突然行かなくなる人も多いわけ。人件費以外はすべて二割減らす。これが小社の不況対策だ。社長兼小使いなので、どんな荒療治も即実行できる。

9月 日 はがきDM「井上伯伝復刻速報」
二千通を発送。

9月×日 小野田の高橋政清氏にお願いして
あった『国司信濃親相伝』復刻版への推薦文
ができた。これでいつでも出せる。

10月 日 東行記念館学芸員の坂太郎氏か
ら、末松謙澄『維新風雲録』、児玉如忠『維新
戦役実歴談』、堀真五郎『伝家録』、野村靖
『追懐録』、井上馨『維新財政談』等の稀観本
を含むシリーズ「維新回顧録叢書」の企画を
持ち込まれた。来年、二十周年の記念出版に
しよう。

10月×日 先日発送の復刻速報を見て、電話
による問い合わせや注文多し。苦心のDMは
反響上々か。

10月 日 今回の「古書目録」は『井上伯伝』
を一人でも多く買って頂くため、安い本ばか
りにしよう。

10月×日 維新史家・福本義亮氏の長女・西
村芳枝さんが来県され、小郡まで挨拶につか
がう。八十過ぎとはとても思えない、笑顔の

いい、達観した生き方のおばあさま。」「吉田

松陰の殉国教育』の復刻は、印税なんか要ら
ないから、頑張ってやりなさい」との有り難
いご託言。

10月 日 上京。元國學院大学教授の米原正
義氏に『陰徳記』の校正刷りを五三〇頁頂く。
これで来年六月には刊行できる。

10月×日 古書組合の機関誌によると、東京
ではクズ本を処分するのに、トンあたり二万
円も出さなければ取りに来てくれない由。

10月 日 『防長歴史用語辞典』の著者、石川
卓美氏が亡くなられ、葬儀に出席。享年86歳。
10月×日 萩の松本二郎氏へ『奇兵隊日記』
の校正刷を持参。

古文書の解読では県内随一の人。95歳の今
も、大きな家に豊饒（かくしゃく）としてひ
とり住いで古武士の風格。

10月 日 ある著名な出版社の最近の復刻版
は、番号入りでもないのに、三百部限定・A5
判一千頁で六万円という。いつか別の社の
「頁あたり30円」に驚いていたが、もうその

二倍。

小社がこれから復刻する三百部限定・二二
五〇頁の『井上伯伝』は、遠慮しながら三万
円につけたが、13万円でもよかったか？

11月×日 『井上伯伝』の部数について考えて
いる。これまでなら三
百八十部だが、やはり時節柄、二割減らして
三百部にしよう。

「不況なればこそ、再読・三読に耐え、一生
どころか孫子の代まで伝えることのできる本
は必ず売れる」と思っているが、それでもビ
びってしまう。信念が足りないのか。

11月 日 『閥閥録』の件で文書館へ。まだ
「審議中」とのこと。

平成6年（一九九四）

1月 日 地方・小出版流通センターのツアーに便乗して、台北の国際ブックフェアに参加する。

初めての台湾は高度成長でわき返っていた。ブックフェアもすごい人出だが、日曜など半分は子供だし、日本では粗大ごみのブリタニカやアメリカナ百科事典が、月給の何倍もの価格でどんどん売れている。

これでは仕方がないとばかり、グループを離れて故宮博物館へ……。

そこで三千年以上も昔の青銅器群に圧倒され、三日間「故宮漬け」となる。バツハやベートーヴェンの音楽にも通じる普遍的な造形感覚だ。これまで中国本土へ三回行き、悪口ばかり言ってきたが、この青銅器を生んだ古代中国にだけは脱帽。

1月×日 トラックに一杯、『井上伯伝』三八セットが入荷した。印刷・製本とも注文通

りで、互恵印刷に最敬礼。すぐ限定番号を記入し、「キャンセル歓迎」のお知らせを挟んで発送する。「中身は良いけど売れない」との玄人評だっただけに、嬉しさもひときわ……。

三八の予定を、途中で弱気になって、「三〇〇部限定」と発表。最終的には初めの勘が当たり、バカの考え休むに似たり。マスコミには全く贈呈せず、もちろん在庫はゼロである。

1月 日 山口県文書館から早くも『萩藩閥閥録』の復刻許可が下りた、『防長風土注進案』のとき八年も待たされたことを思うと今昔の感心「明るく開かれた、県民のための館」になったのだ。

古本屋からは恨まれるが、セット十六万円もしていたものを六万円で提供できるとは、まさに出版者冥利といえよう。

3月×日 昨年の今ごろ不慮の事故で入院され、再起を危ぶまれていた田村哲夫氏が、少しずつ回復され、この一月から『奇兵隊日記』の校正を再開された。「時間をかけても完璧な

ものを」と意欲旺盛。萩の松本二郎氏も御歳九十五歳で、毎日豊饒として本書の校正をしておられる。「内容が面白くてやめられぬ」とか、間違いだらけの日本史籍協会本に頼らず、京都の尊穰堂にある原本と山口県文書館にある写本から、新しく作っているのである。

4月 日 この春休みは、例年になく本を売りにくる人が多い。リサイクルの考えが普及してきたのは喜ばしいが、マンガばかりで頭を抱える、

4月×日 熱海で全国古書組合の総会。この業界もブックオフをはじめ様々なライバルが出現し、いよいよ戦国時代を迎えている。

5月 日 昨秋、隣の下松市に県下最大のショッピングセンターが出来た。その正門前には全国チェーンをめざすリサイクルショップが、今春の古本屋出店を予告していた。こちらも手ぐすねひいて待っていたのに、いざふたを開けてみれば、何とCD屋。古本屋がもうからないことに気付いたのだらう。

5月×日 お世話になっている大久保利謙先

生に『七卿回天史絵巻』の監修者をお願いしたところ、「自分が推薦文を書いた本の監修者に自分になるのは、自画自賛でおかしい。それに私は薩摩だし、長州には田中さんがおられるのだから、そちらにお願いすべきです」といわれた。

5月 日 二カ月間に三回の大久保詣で。いろいろ教えて頂いたうえ、「この詞書（文章）は今日では既に古典なので、しっかり良い本をつくって下さい」と励まされる。

大久保利通のお孫さんは九十四歳なのに、パリパリの現役だからまったく恐れ入る。

7月 日 防府の毛利博物館で、元館長の臼杵華臣氏と新館長の梅田正氏に昼食をご馳走になる。三坂圭治著『防府の今昔』復刻版への推薦文を臼杵氏に願う。

8月×日 大久保利謙氏の提案で、『七卿回天史絵巻』の別冊に『東久世通禧日記』（霞会館発行）から「西航日記」を転載させて頂くことになり、生まれて初めて霞会館（元貴族会館）を訪れる。

元公爵家の毛利元敬氏がわざわざ同行して下さり、何とも有難い。

その毛利氏と会館幹部の人たちの会話をそばで聞いていると、島津、鍋島、小路など殿様や公家の名ばかり出てきて、何だか江戸時代にいるような錯覚にとらわれた。

8月 日 こう暑くして本を読む気にもならないだろう、店はヒマである。新本屋も全国的に返本が激増しているという。

9月×日 『七卿回天史絵巻』は田中彰氏の校訂に念を入れて頂いたため、一か月遅れとなった。

9月×日 ようやく『七卿回天史絵巻』ができた。このたびは下関の瞬報社だが、印刷・製本とも上々で感謝感激。

さっそく限定番号を記入して送りはじめる。三点で五キロもあるからたいへんだ。真夏でなくてよかった。

9月 日 『七卿回天史絵巻』は一冊の返本も苦情もなく、順調に入金をいただいている。
10月×日 大江健三郎にノーベル賞。店の在

庫をすかさず二百円均一から八百円に「出世」させたが、五冊とも午前中に売れてしまった。売れない本の代表だったのに……。

10月 日 『七卿回天史絵巻』PRの経過報告。朝・毎をはじめ各紙の本社版や県内版に載った。でも確率からすると、PR用に三十冊もくばり、それによつて記事に取り上げられたのは七紙のみ。中でも、絵の本だからと放送局に六冊も送ったのは失敗であった。

そして直接売れたのは十五冊。もし自前の販売システムを持っていなかったら、三百部売るためにはどれだけの経費が必要だろうか。

何万円もする本は新聞記事ですぐには売れないし、新聞を読んで注文するような人は、すでに小社のお得意になっているとも言えようが、それにしてもお得意様はありがたい。

10月×日 酷暑で暇だった反動が、店は売買とも忙しい。大口買入れも重なったため、創業以来初めて、店も倉庫も本で一杯となる。皮肉なことに新聞広告社から「急に空気が

できたので」と格安の広告をすすめてくるが、いくら安くても、今さら買入れの宣伝はできない。

11月 日 毎週金曜の、朝日新聞山口版に好評連載中の『山口あのそこのそ』が、自費出版で一冊にまとめられる。故三坂圭治氏夫人・幸子さんの書かれたものである。以前なら小社で出版を引き受けるところだが、今は復刻しかしてないので、せめて販売のお手伝いをさせて頂くことになった。

同封パンフの通りであるが、当時の山口を書き残したものとしては他に類がなく、史料としても面白い。

11月 目 博多にいる二十四才の長男が、来年から店の手伝いをする事になった。

古本業界のことを勉強し、またそこに本を売りにくる人たちの気持ちを知るため、色々な店に同じ本を売って回らせている。もちろん本屋の息子ということは伏せている。売るのは、東京で刊行された歴史書である。たまたま同じ本をたくさん持っているのだ。

歴史専門の古書店では、定価二千円のその本を四五百円に買ってくれたが、不勉強な店や新しく出来たチェーン店では、百円平均である。買値はこれほど違うのに、あとで見にいくと、それぞれの店の売値は、なぜか、どこも同じ千五百円くらい。(もちろんこの値段で売れるとは限らないが・・・)

古本屋といえども繁盛の秘訣は仕入にある。高く買わない(あるいは買えない)店の将来は知れていると思う。

11月×日 『萩藩閥閥録』の予約が早くも、三百セットを超えた。

12月 日 県内にある古本チェーン店に、息子が九州で売り歩いている例の本を売りにいく。定価二千円の本だが、たった十円だという。

仕方なく売り、数日後見に行ったら、何と二百円に付いていた。他の人に買われると惜しいので、また買い戻す。いったい何をしているのやら。

平成7年（一九九五）

ポルノは置いていないので無関係だが、他業界からの進出は、一時的にせよ問題になるであろう。

2月×日 広島に住むお得意様から「身内が阪神大震災で被災してお金があるので『萩藩閥閥録』の予約を断りたい」という電話あり。

このたびの震災による出版への直接の影響はこの一件のみであった。

2月 日 県内の同業者から「昨秋からヒマで困る」との報告を受け、県外のある情報通の業者に電話で一般情勢を聞く。

「北海道から沖縄までどこも悪いよ。主な原因は郊外型チェーン店というライバルが沢山できたことだろう。これが積極的に買ったため、安易な商売をしていた店は買入れが減り、品薄になって売上げが落ちてきているようだ。それとも一つ、ポルノが売れなくなったのも響いている。ポルノ写真集がポルノビデオに変わり、ビデオは専門の店がどこにでもある。どっちにしても、これまで楽をしすぎた反動では」とのこと。

差し上げ、小店への感想などを無記名で採点してもらっている。「思ったより高かったか、安かったか」の項目では半数が「安かった」でがっかり。売手と買手の思惑違いは永久に続くものらしい。

2月×日 幕張メッセでの「国際ブックフェア」と、幕張プリンスホテルでの「地方・小出版流通センター 二十周年感謝パーティ」に行く。

「ブックフェア」は見るべきものなし、同じお祭騒ぎなら、昨年見にいった台北のフェアの方がはるかに上だった。

「パーティ」は出版・流通の関係者が四百名近く集まり大盛会であったが、地方出版者の出席は少なく、中国地方からはこのQ生だけ。この二十年間の栄枯盛衰を思い感無量。

2月 日 久しぶりに下関の東行庵へ一坂太郎氏を訪れ、明治二十四年に刊行された珍本『戊辰戦役絵巻』を見せてもらう。長州藩士・林半七が作らせたというものだが、史料としても面白い。ぜひ復刻したい。

2月×日 店に本を売りに来られたお客さまに、そのつど「買入アンケート」のハガキを

昨年度小社の古本部の、売上と仕入の割合はちょうど五〇%。平均すれば、売値千円の本を五百円で買っていることになる。これ以上高く買つと、店はずぶれる。

2月 日 初めて店頭に着板を作った、「本買

います。電話一本買取参上」という文面で、とてもよく目立ち効果満点。でも、この場所に移って二十年もたつのに……。なぜもっと早く作らなかつたのか。

2月×日 『萩藩閥閥録』と『大内氏実録』の発送に追われる。予約に漏れたかと心配する電話が毎日十件以上もかかってくるので、気ぜわしい。

3月 日 すべての発送を終え、大安心しているところへ「第四巻に乱丁があります」との電話あり。厚い本の製本は今も手仕事なの

でその本だけかと思いきや、信じられないこととに、どの本もみな乱丁である。まさに青天の霹靂。直ちに刷りかえることになった。

3月×日 『閥閥録』の乱丁は、送ってから二週間もたつのに、どうやら他に気付いた人はいないらしい。

3月 日 『閥閥録』第四巻の件、まず「お断わり状」を送ったあとで、刷りかえた本を送った。

ところが何頁が乱丁なのかを知らせなかったため、「どちらが乱丁本かわからなくなった」という電話をたくさん頂いた。(…ちなみに、一四七頁あたりです)

4月×日 妻木忠太ほかによる『松菊木戸公伝』を復刻すべく、関係各方面に承諾を依頼すでに何度かお願いしたところばかりなので、どこもふたつ返事で快諾である。

5月 日 店頭看板の効果が大口の買入れ相次ぎ、店が本で埋まる。

古本屋は「仕入さえあればいつか必ず売れる」といわれていたが、「売れさえすれば仕入

れはある」時代になったのか。

5月×日 十年以上も「六時閉店」だったのを、この一月から三十分延長していたが、息子が少し慣れたので、店を任せることにして、ついに「七時閉店」となる。Q生の出番はなくなり、午後は自宅で出版の仕事や郷土誌の整理をしている。

5月 日 招かざる客、税務署が一週間以上いた。追徴税は取られなかったが、時間を取られたため、今回の古書目録は手抜きになった。次回からはA5判のきちんとしたものにした。えつ御期待。

8月 日 このたびの出版は『中野梧一日記』も『国司信濃親相伝』も、印刷所のミスに泣かされた。中国地方で一、二を争う両社とも、最後に同じような失敗をしたのである。

何度も校正したのに、なぜか初校のまま印刷されている……。こちらでは防ぎようがなく、そのため刊行が大幅に遅れた。なぜ、地方印刷所の質がこんなに落ちたのか。

8月×日 東京大学出版会から『木戸孝允日記』の復刻許可がおりた。小社の信用も捨てたものでもないと嬉しくなる。同会の、学問の成果を私しない姿勢に心からの敬意を表したい。

8月 日 東京の古書屋・上野文庫主人 中川道弘氏が来店され一献。

ユニークな歌集をはじめ、古本屋についての川柳や小話集などの著書もある中川氏は、いろいろな職業を経て五年前からこの業界に入られた。今は上野の一等地にある店で、独自の「戦う本棚」づくりに励んでおられる。店をおろそかにしている私など、爪の垢でもせんじて飲まなくては……。

8月×日 『国司信濃親相伝』復刻の記事が、一か月遅れで字部の地元紙に載った。

いつも直販で売り尽しているため、どんな記事でも注文はほとんどこないのに、今回は意外と地縁・血縁関係者からの電話注文が多い。新聞社に悪いため、わずかに残しておいた在庫を放出。

9月 日 東京の米原正義氏から『陰徳記』の最終校正が返ってきた。入念に手を入れて頂いたため八年かかった、明春には必ず刊行しよう。

9月×日 上京。丸の内の事務所に木戸孝允の末裔・木戸孝彦氏を訪れる。

電話の対応ではとても気むずかしい人かと思っていたが、聞くと見るとは大違い。にこやかに物わかりのよい紳士であった。『松菊木戸公伝』と『木戸孝允日記』の復刻を無条件で承諾して下さり感激。

9月 日 「再販制」をめぐる論議が賑やかである。私は次のように思う。

本は読者のためにこそある。新刊屋や取次店のためにあるのではない。読者不在の制度は滅びるしかない。

あらゆる商品が電話一本、翌日には届く現代、なぜ本だけ一か月もかかる？ 出版社への直接注文ですべては解決するのに、なぜそれができない？

やがて、パソコン通信などで選び、出版

社に直接注文する時代がくる。そして新刊屋は不要になる。

9月×日 「人物事典」は人名の読み方一つをとつても難しい。今回復刻した田村哲夫編『維新関係者要覧』に、間違いがあったら読者に指摘して頂こうと「専用ハガキ」をはさんだ。五百部も売れたのに、ハガキはわずか五通しか返ってこない。さすがよくできた本といふべきか。

10月 日 内田伸氏に電話して『木戸孝允日記』について伺う。

そのとき「得富太郎著『幕末防長勤王史談』は通俗読物とばかり思っていたが、このたび読んでみるとなかなか面白い。独自の史料も使っており、復刻してもいいのでは……」といわれた。(数日後東京で、完全無欠の全十巻極美本を運よく入手。厚かましく、内田氏に推薦文をお願いした)

10月×日 上京。毛利家の当主・毛利元敬氏にパレスホテルでご馳走になる。毛利家のおかげで多くのすぐれた史料を復刻させて頂

ている上に、有難いこと。

10月 日 神田の古書価を拾うと、

『松菊木戸公伝』四万八千円

『久坂玄瑞全集』五万八千円

『前原一誠伝』四万五千円

『品川子爵伝』三万八千円

『大内氏実録』一万八千円

『防長風土注進案』四十八万円

いうまでもなく、これはもし売れてもあとの仕入れの保証がないための防衛価格である。この価格でいつも売れているわけではないと思つ。

10月×日 秋の徳山祭なのに人出はパツとしない。もっとも人が出ても、昔からお祭と古本屋は関係ないのだが。

それにしても、県内最高の地価を誇るわが徳山銀座商店街の凋落は、目をおおつばかり。平日を含め、人出は全盛期の半分以下だ。

11月 日 「山口県史料目録」を充実させようと思つて、今春、三十万円も出して専用のパソコンソフトを買った。

でも小社の場合、出版が主なので、どうしても目録に力が入らない。先号の本紙で「次はA5判のきちんとした目録を……」と予告したのに、何ともお恥ずかしい限りである。

11月×日 今春復刻してすぐ売り切れた『萩藩閩閩録』の注文が後を絶たない。もっと刷っておくべきだったか？

いや「復刻は限定五百部まで」という大原則を曲げてはいけない。

11月 日 『松菊木戸公伝』の原本を持って上京。印刷所に入れる。

この原本は三方金箔の超豪華本である。もう二度と入手できないであろう極美の特装版をバラすのはもったいないが「一粒の麦」は死して五百部の復刻版となるのだ。

11月×日 神田で『木戸孝允日記』を見つけた。店主いわく「この本はこれまでずっと六万五千円で売ってきたが、お宅が復刻するので仕方なく三万五千円に下げた」と。

もちろん即座に購入した。すでに田中彰氏に提供していただいているが、少しでもきれ

いな頁を使えるため、復刻用の原本は多いほどよいのである。

11月 日 『奇兵隊日記』の最終校が峠を越えた。まだ手足の不自由な田村哲夫氏が、病院のベッドで、奥さんの手を借り、死力を尽くして校正に打ち込んでおられる姿は、涙なしには見ることができない。索引の仕事は、萩の長老 松本二郎先生。当年とつて九十七歳の壮者をしのぐ元気に圧倒される。

12月 日 今回のDMに山口県史料以外の本の目録を入れたところ、意外に注文が多く、約三分の一が売れた。店では動かない本が必要とする人に流れていくのは嬉しい。